

裁判の季節

神代雄一郎

表現の自由・言論の自由

「巨大建築に抗議する」を書いてから、ちょうど1年半になる。その間、もう一度書くようにすすめられたけれど、少しでも多くの方がたの意見を聞いてからと考えて、待った。もともとあの原稿は、その冒頭部分ではっきりわかるように、批判精神の薄い建築界をたしなめて、わざわざ挑発的に書いたものだったからである。だから、誌上で堂々と書き答えてくださったものは、うれしく読んだ。と同時に、わたし以外の「巨大建築に抗議する」の報道を集めて、もう一度書く用意もしていた。その中には、ロングランになった映画「タワーリング・インフェルノ」のラストで、「人間の傲慢さを記念するため、この焼け跡は残しておくべきだ。」とつぶやかれる建築家の言葉もあれば、「ギリシャ以来、建築、彫刻、学問に限らず、調和の精神が根本にあった。ものの大ささ、スケールには、そのへんまでという限界があった。……それが20世紀になっておかしくなった。科学技術の進歩が、資源も無限、地球の容量も無限だと錯覚させた。……8年前日本へ来たとき、経済成長に限界を考え、調和をはかるべきだと他の専門家とともに述べたが、反響はなかった。……日本の歴史は調和の美学でしたのにねえ。」という、「スケールの哲学」「ほどほどの哲学」を主張するステーブン・グロバード博士の言葉もある。かの有名なシドニーのオペラハウスの、初年度の収入が12億円で支出が24億円、その穴埋めにオペラハウス宝くじが発売されたという報道もあれば、あたかもそれに応えるかのように、日本の国立オペラ劇場建設の夢にむかって、日本の一オペラ演出者が、聴衆を退屈させない客席数はせいぜい1,500席、なぜみんな大きな劇場を建てたり建てたがったりするんでしうね……、と語った記事もある。

つまりは、直接わたしの意見に賛成してくださった方はあまりなかったけれど、間接的には、同じような見解がかなり発表されていたわけである。にもかかわらず、わたしはだんだん、もう一度書くことに嫌気がさしてきた。その原因のひとつは、何となく人

づてに妙な圧力がかかってきたからである。そしてもうひとつは、建設界の不況が決定的になってきて、何となく建築家の元気がなくなり、わたしの問題提起もいっしょに沈潜してしまったからである。たとえば、この間に新宿西口にはもうひとつの巨大建築、超高層ビルが加わったわけだが、これについては誰も何もいおうとしない。この第2の原因については、またあとで触れるとして、第1の原因、何となく妙な圧力がかってきたということ、それは今にはじまることではない。まがりなりにも4半世紀評論活動をしてきているから、その間にはさし止めになって陽の目をみなかつた原稿もあれば、間に立って苦労してくださった編集者のおかげで、何ヵ月か遅れて何とか印刷になったという原稿もある。そんな経験から、「巨大建築に抗議する」の場合も、一応事前に編集者に内容を語り、大丈夫かな、大丈夫ですといったやりとりはしてある。ちゃんと印刷になり、編集者は続けて問題にさえしてくれたのだから、わたしとしては何もいうことはない。妙な圧力は、わたし個人の身から出た錆か、あるいはまた大きく建築界を覆うその体質によるのだろう。

だがである。人づてに何となく妙な圧力がふりかかりはじめたなど感じた段階で、わたしはわたし自身の「巨大建築に抗議する」をはじめ、多くの方がたからいただいた反論を読み直し、そこでこれは困ったなど、本当に嫌気がさしてしまったのである。それは反論の内容を、その時点でわたしがこう読み取ったからである。神代はデザイン・サーヴェイをやっていればいいので、建築というものを、その建設中に批評するなどとはもってのほか、完成時の評論も意味ないことで、批評というのは建築が使われて数年たってからやるべきであり、建築家の設計や監理の苦労をしないにも程がある、という具合にである。これは困ったことなのである。わたしはコミュニティ調査をやっていればこそ、巨大建築に抗議するわけなのだが、これはわたしの文章表現がいたらなかつたので、そこまで理解していただけなかつたのだろうと考えあきらめるにしても、批評に条件がつけられ、言論の自由を奪うような主張をされては困るのである。評論という仕事は言論の自由を

もとに成り立っているものなのだから、わたしは、いかに批判精神の希薄な建築界ではあっても、表現の自由、言論の自由といった基本的な人権は認めあった上で、やりとりやつきあいが存在しているのだと思っていた。建築の建設途上に批評があって、それがきっかけになって住民運動が起り、工事が中止されることは現に存在しているし、逆に建築が守られることだってある。またそういう過程で、批評が真実を突いていなければ、その評論家は逆批判を受けて淘汰されて行く。それでいいのであって、批評を頭から禁じるような姿勢、衣の下に鎧がチラチラみえるような権力的姿勢を感じてしまうと、何をいうのも嫌になってしまふ。もう批評をやめてしまった先輩評論家が、シンドイのによくやってるなあ、といった言葉が思い出される。

挑発、告発、あるいは裁判

だが、批評もなく、あるいは批評を禁じ、それで天下泰平だと思うのもあやまりであれば、ひたすら景気の回復だけを待って、自己の姿勢を問いかねようとしているのも、あやまりである。わたしは、建築家が小走りに巨大建築に動員されていった、高度経済成長と呼ばれる時期は、実は日本がもう一度戦争をやったのだと理解している。経済戦争をやつたのである。戦争に言論弾圧はつきものである。わたしの「巨大建築に抗議する」も、その余波を受けたらしい。わたしはそれを先に、身から出た錆かもしれないと思いつたけれど、批評のないところ、言論の自由のないところであえて言あげしようとすると、それは自然に挑発的姿勢をとる。さらに進めば告発的になる。多くのミニ・コミがそうした姿勢をとっているのは、それが大勢（体制）に抗する少数意見だからである。だが、その挑癲的姿勢や告癲的姿勢を嫌って、それを封じこみ、押えこんでいると、そこにはにわかに裁判の季節が到来する。高度経済成長——経済戦争に敗れた不況の現在、実は終戦処理期なのである。世の中は告癲にあふれ、戦争裁判がはじまる。ロッキード事件がそれを象徴している。常日頃批判を封じ、批評のなかった分野では、そのとき一足飛びに非人間的な証人喚問劇が繰りひろげられる。建築界とも、これは航空機の話だと、傍観してはいられないはずである。

1972年の夏、60階建ての建築工事現場で、カーテンウォールの数枚のガラスの破損が発見された。建物は完全に覆われていなかつたので、建築材料の落下によるものだろうと考えられた。ところが「9月と10月には、9階から16階に至る、建物のあるコーナーのガラスが破損はじめた。調査の結果、43枚のガラスパネルがとり外された。このうち約半数が破損しており、その他は予防的目的で外されたものである。そして1月20日に、建物が完全にカバーされた後で、9階から32階の間で16枚のガラスパネルが風の

ために外れて落下した。」「それが落ちるときに、他の50枚のガラスをさらに破損した……。」幸せにも、これは日本の話ではない。いまや有名になり、国際的に注目されるボストンのジョン・ハンコック・ビル事件の、その発端の状況である。わたしはそれを、「SD」誌（1973年5月号、1974年1月号）の、高瀬隼彦・芦原信孝編のワールド・トピックス「続・ガラスの破損と建築家の責任」「続々・ガラスの破損と建築家の責任」をたよりに、それから引用させていただきながら書いているわけである。もっともわたしはこのジョン・ハンコック事件について、他に直接アメリカ人から情報を得ている。ニューヨーク在住の美術評論家である彼と昨秋東京で会った時、I・M・ペイさんの仕事が近頃わざと高価な建築を対象にするようになったと、彼は語っていた。10年前にわたしが会ったペイさんは、都市の住宅開発に力を注いでいて、わたしはその仕事ぶりに感心したものだったが、その後の変容はちょっと想像しにくい程だった。そして、ジョン・ハンコックの話になった。当初、関係者はこれ程の大事件に発展しようとは考えていないかった。それは「SD」誌（1973年1月号）がはじめて「ガラスの破損と建築家の責任」を取り上げて、まとめて報じているように、それまでに、SOM設計のシカゴのシビックセンター・ビルのガラスにひびが入ったり、ケビン・ロー設計のニュー・ヘブンのナッシュ・オブ・コロンバスのヘッド・クォーター・ビルのガラスが、暴風で40枚ほど吹き飛んだりという事故が、数々起こっていたからである。ジョン・ハンコックの場合、落下するガラスで怪我をする人はなかったが、強風が吹くと周囲の道路は通行止めという騒ぎになり、ボストン市議会の都市再開発委員会は、13階以上の高層ビルの建築許可を、さしあたり1年間中止しようという緊急動議の審議をはじめた。しかも、ガラスの破損は建物を完全に囲んだ後もつづき、それは低層部と西側に集中して起こった。ビルへの入居開始予定日を過ぎた1973年9月という時点で、「全カーテンウォールの板ガラスのうち約3,100枚が、傷ついたり、落下するガラスや破片、風などで破損されたり、または災害予防の目的で取り除かれた。これらのガラス全部が防火用の黒い塗料で塗られたベニヤ板に取り換えられた。……現在、追加の1,900枚が取除かれており、これが終ると計5,000枚のベニヤ板がガラスに取つてかわることになり、これは建物表面の10,348枚のガラスの約半数を占めることになる。」事態となった。

ついに、全ガラスパネルの交換が決定された。はじめの2重で、間に空気層をもつガラスは、1重の強化ガラスに換えられ、それは当初のカーテンウォールのコストとほぼ等しい700万ドルという巨費をつかって、1975年5月に完了した。高瀬氏によって伝えられた最新情報（「ジョン・ハンコックのその後」SD誌3月号）によると、同時に建物のコアの補強、ゆれ止めのダンパーの設置、暖房の再設計

などが行なわれたという。「ガラスの交換が完了し、3年半の遅延の後に、ようやくビル完成のメドがついたところで、昨年の9月、ビルのオーナーであるジョン・ハンコック生命保険会社は、設計者であるI・M・ペイ設計事務所、ゼネラルコンタクターのギルベイン建設会社、カーテンウォールの下請会社であるロバートソン社、ガラスメーカーのリビー・オウェンス・フォード社……を一括相手どって、主としてガラスの破損による損害と、それによって起きた3年半に及ぶ建物の完成遅延による損害の賠償を求める訴訟を起こした。訴状によれば、損害額は明記されておらず、裁判所が損害額と、それを誰が支払うべきかを決定することを求めているが、一説によれば、損害額は5,000万ドルに上るとされている。建物の元来の建設コストは7,500万ドルと見積もっていたが、建設コストは1億2,500万ドルにふくれ上がっており。」「これに対し、ペイ事務所や、ガラスメーカーのリビー・オウェンス・フォード社が反対訴訟を起こしたのも、このような場合、また当然の成行きであるが、ことここに至ると、関係者間の責任のなすり合いとなり、かなり泥試合の様相を帯びてくる。」と、高瀬氏は報じている。

「ともあれ現在、建築家のみならず、医者、弁護士などのいわゆるプロフェッショナルに対するマルプラクティス（失態）訴訟が大きな社会問題となっているときに、ジョン・ハンコック・ビルのケースが、アメリカの建築界に投げかけている問題はあまりにも大きく、また深刻であり、日本の建築界にとっても他人ごとではすまされない問題だと思われる……。」

デザインは裁けるか

ところでわたしは、「巨大建築に抗議する」では、巨大建築の社会的意義——現在の日本では、コミュニティの育成を助長するような小規模建築が大切で、建築家はそれに力を注いで欲しいし、巨大建築の建設には手ばなしで喜べるような社会的よりどころがないということ——と、巨大建築の場合デザインが質的に低下しているということをいったつもりでいる。いまジョン・ハンコックで問題になっているような、マルプラクティスについてはほとんど触れていない。日本でこういう大問題が起らぬいでいるということは、有難いことだ。見えない客席や聞えない座席があつても、外壁をよじのぼって自殺するものがでても、レストランのテーブルが地震ですべてカーテンウォールに衝突しても、そんなことはご愛嬌といつていのだろう。デザインは悪くても、ジョン・ハンコックのマルプラクティスはない方がいいにきまっている。

だが日本の場合は、そこに問題があるのではなかろうか。幸いにもジョン・ハンコックのような大事件は起こっていない。だがデ

ザインはよくない。このデザインがよくないということは、実に建築家の職能の主体性にかかる大問題だからだ。ジョン・ハンコックの場合、ペイさんが反対訴訟に踏み切ったのは、法によって裁かれる裁判闘争の常道だろうが、その背後には自己のデザインに対する自信が感じられる。ジョン・ハンコック・ビルのデザインは、実にすばらしいからである。それは高瀬氏が、「筆者は、ガラスが交換された後の姿はまだ見ていないが、最近ボストンを訪れたある建築家によれば、やはりデザイン的には素晴らしい作品であり、ミラーガラス建築の決定版として、また、ペイ事務所の傑作として、高く評価されるべき建築であることは疑いの余地はない」と伝えていることからも、またそえられている写真からも、想像がつく。わたしもこのビルは見ていない。だが、かつて歩きまわった、あのリチャードソンのトリニティ・チャーチがあり、マッキム・ミード・アンド・ホワイトの図書館が建っているカブリ・スクエアに、それらに隣接してオフィス・ビルを設計するという課題が、いかにもむつかしいものだったかはよくわかる。そして、完成した写真みて、これ以外の、これ以上のデザインはなかったろうと考える。「つまりコブ（ヘンリー・コブ、ペイ事務所のデザイン担当のパートナー、ボストン生れ）たちは、平行4辺の平面を持ち、上から下まで、反射性ガラスで被うことによって、その壁面が、既存の町の景観を超現実的に映し出して、事実上消えてなくなってしまう、というデザインに到達したからである。これは、現実に、この60階建のビルが、道路の高さからみれば、トリニティ・チャーチのロマンチックな映像の中に消え去り、また、少し高いところでは、空の映像の中に消去されてしまうのを、その目でみないとなかなか信じ難いことである。」さらに、「ブロック配置にみられる、きわめて微妙な角度で置かれたこの建物は、唯単に有効なオープンスペースをつくり出しただけなく、同時に、ブロックの角と、カブリ・スクエアとをしっかりとおさえている。しかもそれのみか、この配置は、それまで、細い道路によって、窒息しそうになっていたトリニティ・チャーチの南立面を、突如として、ドラマチックに現わすことには成功したのである。」

「ジョン・ハンコックは、ひと口にいって、建築家がいかに機能するか、という教科書的な実例である。もし、もっと無神経な建築家の手になれば、このような建物は、容易に歴史的な広場の環境を破壊したであろう。彼らの手になったおかげで、この建物は、その環境を保存したのみならず、さらに一層高めることができたのである。」（「続々・ガラスの破損と建築家の責任」「SD誌」1974年1月号。さらにこの設計が、ボストン市中心部で緊急に必要とされていた仕事口を与え、市の財政をうるおし、容積制限の特例の見返りとして児童博物館が実現寄付されたことなども引いて

おきたいが、引用があまりに長くなるので、くわしくは原文献をみていただきたい。ジョン・ハンコックの場合、建築家が教科書的・模範的といわれるほどに、その設計により、デザインにより、つまりは彼らの職能の重心によって、みごとに社会的に機能したこと、わたしは疑わない。それは大きな裁判問題をひき起こし、訴訟・反訴訟をめぐって泥試合の様相を呈しているといわれるが、そのデザインが抜群にいいということが、わたしには救いとして感じられる。恐らく、デザインの優秀さが、直接この裁判を左右し、建築家を有利に導くことはないだろう。裁判は安全性や経済性は裁き得ても、デザインを、芸術を裁くことはできないだろう。だが、だからたとえ建築家が裁判で敗れるようなことがあっても、すぐれたデザインだけは残り、建築家の職能の主体性は犯されずにすむのである。

経済戦争の犠牲者

日本の場合、ジョン・ハンコックのような大事件は起こっていない、しかしデザインはよくない。そこにかえって問題があるのでなかろうかと、先に書いた、はたせるかな、日本の経済戦争（高度経済成長）の後の裁判の季節は、人呼んで公取問題という、ジョン・ハンコックとはまったく次元の違う姿で訪れようとしている。「新建築」3月号の「編集者の眼」は、「日本建築家協会が公正取引委員会と対決することになりました。昭和47年の八女市の疑似コンペ、滝野川の間違い入札の戒告に端を発したこの問題は、国会でも取上げられるなどのいきさつを経て、昨年12月25日に公取から建築設計競技規準や報酬料率規定の排除などに関する正式な勧告がなされ、今年1月14日に家協会がこれを拒否、公取における審判の結果によって裁判に委ねられることになることが予測されています。」と書きおろしている。ジョン・ハンコックを「SD誌」が熱心に追っているのに対して、この公取問題は「新建築」が力を入れて報道しているようで、わたしは同誌にのっている程度の知識しか持ち合わせていない。その程度でもものいようと、また叱られそうな気もするが、この問題、つまるところは公正取引委員会ともあろうものが、建築家を商売人としかみていないとところにあるのだろう。ジョン・ハンコックに比べると、何とも次元の低いところで裁判に巻き込まれそうな状況である。建築家の職能の主体性は、設計なりデザインなりによって社会に貢献することで獲得され、社会的に確立して行くものだと思うが、そのためには必ず建築(家)界の内部に、自身のあるべき姿を問いつづける批判精神が溢れていなければならぬだろう。評論家の口を封じようなどと考えるのではなくて、評論家を巻き込んで批判精神を高めることを計るべきだろう。公取問題では、よく医師・弁護士・芸術家が類似職能として引き合いに出される。だがは

やい話、これらの職能では、先の戦争——今度の経済戦争ではなくて、その前の武力戦争（太平洋戦争）の後で、戦犯を裁き出している。しかし建築(家)界内には、そういう批判は起らなかった。しかも、これがドイツの場合になると、多くの建築家が戦争中に亡命しているし、たとえばハンネス・マイヤーは、キリスト教徒でないものが教会を設計できないように、自分の設計する建築にはハーケンクロイツをつけるわけには行かない。“建築は事務ではない”と叫んでナチの支配から逃げだしているのだが、日本の建築家たちは、まだほとんど、そんな主体性をもつほどには、育っていなかった。戦後の復興が順調に進めば、その中で日本の建築家たちも育ち、文化の担い手として社会的コンセンサスを得ることもできただろう。だが不幸にも、今度は経済戦争がはじまってしまった。先の戦争で内部から戦犯を裁き出せなかった建築(家)界は、またまた小走りに戦争に動員されてしまった。経済戦争に参加したものが、経済問題で、裁かれるのは当然だろうと、文学者や画家たちは見ているかもしれない。建築家は経済戦争の犠牲者だと、だが本当の戦争の犠牲者は何時も人民なのだと、そういっているかもしれない。

建築家は「社会の文化的側面を担う職能であるという点も、理念としてはまさにその通りで、またそうであって欲しいのですが、つくられる建築のほとんどは経済体制にからめとられてしまっていて、文化的に社会に貢献するまで行っていないのが現状ではないでしょうか。」という「編集者の眼」の発言が、穏当な客観的意見なのだろう。

経済学者にいわせると、商品はまずその価格が安いということ（経済性）で買われ、ついで使いいかどうか（機能性）で買われるようになり、次に、安全性で、最後に芸術性で勝負するようになるのだという。経済戦争のあとでも、なおあらゆる分野で経済が先行し支配している日本では、建築家が商売人に見られ、建築が商品と考えられるのも、あるいはやむを得ないのかもしれない。お隣りのデザイン界には“ええ、デザイナーは商売人です”と開き直る大御所さえいるのだから、建築家もひとつ開き直るとして、さてそれにしても、安いか高いかといったいちばん低次元なところで裁判ざたになろうとはあわれである。せめてジョン・ハンコックのように、デザインはすばらしいが安全性がというような次元で、あるいはボルノだっていい、文学や映画で話題になるような芸術性の次元であって欲しかった。そういう、建築でいえばデザインの社会性といったところで、たえず批判があり、話題をふりまくようであれば、建築家の職能も自然に認められてこようというものだ。いや、RIBAの「建築の危機」（『建築家』日本建築家協会・1974秋）のような議論を、みんなでやりあえるようになりたいものだ。低次元の裁判は、ただ精神の荒廃をもたらすばかりだからである。